

特集・足立明教授追悼

特集にあたって

—足立明と「非近代」の地域研究—

藤 倉 達 郎*

1. はじめに

京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科の足立明教授は、2012年8月26日に59歳で亡くなった。翌年3月に京都大学稲盛財団記念館で「偲ぶ会」が行なわれたが、それに合わせて、ニマル・カストゥリアラチ氏はじめ11人の「スリランカの友人」から連名で手紙が届いた。これらの人々は足立教授のスリランカ留学時代から30年以上のつきあいがあった人々である。その手紙には、足立教授の飾らぬ人柄や、ペラデニア大学の寮で、政治、社会問題、民族紛争、経済政策、開発援助、人類学、仏教、ヒンドゥー教、国際関係、西洋のヘゲモニーなどありとあらゆることについて賑やかに、夜遅くまで議論した思い出が綴られていた。また、足立教授が工学部出身で、最後まで科学的客観性 (scientific objectivity) を重んじていたこと、しかし時期によって、マルクス主義、構造主義、ポスト構造主義、言説分析、アクター・ネットワーク論などのさまざまな理論に傾倒していたことが書かれていた。私が足立教授に初めて会ったのは、博士課程を了えたばかりの2004年の夏で、同僚として間近で働かせていただいたのはその翌年の夏から、つまり最後の7年間だけである。しかし、この追悼特集を組むにあたって、私も足立教授の残した文章のいくつかを再読しながら、その知的旅程の一部と、そのなかで一貫しているように思える問題意識について考えてみたい。

2. シンハラ農村の労働交換

足立明は自らの学部生時代について、「災害研の古机」と題されたエッセイのなかで次のように書いている。

当時は気だるい時代であった。60年代後半の高揚は過ぎ去り、大学に入っても授業がちゃんとあった。半年くらいはストで何も無いと思っていたので慌てた。時代は政治から環境問

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

題に移り、高度成長の矛盾を前に、近代をどう考えるかというテーマが盛んに議論されていた。大状況の議論は後退し、地域でシコシコが流行り言葉であった。そう言えば花崎皋平さんの本なんかも結構読まれていた。高校でデモくらいはやってしたが、我々が盛り上がる前に、世の中では終わっていて、何もしないのに挫折感があった [足立 2003: 31]。

足立は当時、京都大学工学部衛生工学科の学生だったが、放射性廃棄物をどのようなコンクリートに詰めて海底に捨てれば安全かという研究を何十年も行なってきたという教授の話を聞いて興味を失い、授業に出なくなったという。また、この文章には「大学や公共機関の施設・機材を住民に開放せよ」というスローガンのもと「人民のための学問」を築き上げるために、尼崎の住民とともに騒音調査を行ない、また、とある職場の空気中の有機溶剤分析などを行なおうとするが、高価な機材を壊してしまって挫折する様子が自虐的なユーモアとともに描かれている。具体的にはガスクロという検査装置を100Vの電源につなぐべきところ、200Vにつないでしまったのである。「施設解放闘争は危ないことが分かった。住民にならともかく、学生に施設を開放してはいけない。このとき、私の施設解放闘争は終わった」 [足立 2003: 32]。

その後、人類学に関心をもつに至った理由に関して、足立は、生態的な意味で相対的に閉鎖された伝統社会について考えたいと思った、と説明していた。また、調査地としてスリランカを選んだのは、それがさまざまな生態環境をもち、多様なエスニック集団が交差しながら暮らしてきた場所であるからだといっていた。足立はペラデニア大学に籍をおき、スリランカのシンハラ農村における互酬的労働交換についての臨地調査と分析を行なった [足立 1988; Adachi 1990]。この研究のなかで、足立はハルミ・ベフ [Befu 1977] を参照しながら交換行為は次の4つのレベルから分析することができるという。すなわち、1) 交換が行なわれる広い意味での社会・文化的文脈、2) 互酬性の一般的な規範（「受けとったものには返礼をしなければいけない」）、3) 特定文化における交換の細かい規則（ある種の交換において、いつなにをどのように返礼しなければいけないか、など）、そして4) 交換の戦略（上記のような文脈や規則の範囲内で、どれだけ、どのように交換するかという現実の場での交換行為者の決定または選択における戦略）のレベルである [足立 1988: 522]。このように整理したうえで、足立は、みずからの目的は、4番目のレベル、すなわち、「社会・文化的な文脈」、「互酬性の規範」、「交換の規則」を前提として、交換において個人が実際にどのように、誰と優先的にどれだけ交換するのかを決定しているのかを明らかにすることだという。そのレベルまで捉えなければ、労働交換の体系的かつ現実的な像を理解したことにはならないというのである [足立 1988: 523]。

「多くの都市生活者にとって、互酬的労働交換というものは、農村地域の伝統的な平等主義の一形態と映るかもしれない」と足立は書く。たしかに、労働交換の結果だけをみていると、「その中に飲み屋での等量の酒のやりとりのようなほのぼのとした平等主義が見えてくる」。

しかしそのような「予定調和的な像」だけでは現実を描いたことにはならない〔足立 1988: 568〕。足立は交換労働への需要とそれを満たそうとする戦略という視点から、インタビューと農業労働への参与観察に基づく緻密な量的・質的分析を通して、農民たちの具体的な意思決定のあり方を描く。そして、労働交換はたしかに前資本主義的な労働組織の一形態であるが、しかしそれは「明らかに文化的遅滞でもなければ前資本主義経済の残滓でもなく、彼等の置かれた現在の生態的、社会経済的条件に対する一つの意識的な適応形態なのである」と論じる〔足立 1988: 568-569〕。

ここで注意しておきたいのは、足立自身も、農村の労働交換をほのぼのとした伝統的平等主義のあらわれであるとみてしまいがちな、「都市生活者」のひとりであるということだ。先に触れたように、足立は放射性廃棄物を作りつつけているような社会を一時離れて、生態的に比較的閉ざされた「伝統社会」について学びに来たのであった。しかし足立は、その「伝統社会」に暮らす人々を、「わたしたち」とまったく異質な心性や行動原理をもつ人たちだとして描くこと、ましてやそのような「伝統社会」の記述を「わたしたちの社会」の批判に利用することを、自らに強く禁じていた。スリランカの農村で焼畑と水田耕作を行なうこれらの人々は、たしかに、都市生活者とは大きく異なる生態的状況や社会的規則のもとで暮らしている。しかし、さまざまな拘束条件のもとで、個々人が便益獲得を目的として功利的・戦略的にも行動する、あるいは行動せざるを得ない、という点においては、大阪や京都の町中に暮らすわたしたちと変わるところはないのである。「互酬的交換」を含め、社会的行為について記述するとき、多くの人類学者が行なってきたように、当該社会で共有されているようにみえる「規範」や「規則」を書きただけでは、十分な民族誌とはいえない。それでは、「ホンマのところ」まで描いたことにはならないのだ、と足立はこの論文でいっているようにみえる。

3. 開発現象と人類学

スリランカで8年間を過ごしたのちに帰国した足立は、京都大学東南アジア研究センターの研修員を経て、北海道大学文学部の教員になる。その後、1990年代、足立にとってひとつの重要なテーマとなったのが「開発」である。足立自身もかつてそうであったように、多くの人類学者は近代化や開発のできるだけおよんでいない「伝統的」な地域を選択し、そこで、近代とは異なる「文化」や「社会」のあり方を探し求めてきた。

しかし、いくら都市からはなれ、野生の象が出没し、電気のない地域を選んでも、村人は農薬と高収量品種の種を用い、耕作し、トラクターのバッテリーでテレビをつけ、西欧の消費社会を眺めている。もはや「伝統的」な地域などはなく、そもそも近代世界システムと関係のない「純粋」な伝統社会などなかったということは、世界システム論などが示している

[足立 1995: 137].

対象社会のどのような面に焦点をあてて研究しようとしても、スリランカを始め、ありとあらゆるところに「蔓延」してしまっている「開発という、とらえどころのない複雑な現象の正体をもはや無視することができないのである」[足立 1995: 136-137]. ここで人類学者は、ある種の倫理的・政治的課題に直面する。開発政策に積極的に関り、開発を推進する立場に立つのか、あるいは、開発政策の犠牲になりがちな弱者の立場を代弁し、よりよい土着の発展を助けることを目指すのか。しかし、どのような選択をするにしても、まずしなければならないことは「開発という正体のわからない現象をまず理解することである」[足立 1995: 138]. つまり、よい開発や発展の仕方があるということを前提としてそれに資するために行なう「開発人類学」ではなく、まずは開発現象そのものを、これから理解されるべき学問の対象としてとらえる「開発の人類学」を行なわなければならないのである。この開発の人類学を行なうにあたって、足立がとくに注目したのが、アルトゥーロ・エスコバルらによって提唱されていた開発言説アプローチである [Escobar 1984]. エスコバルは、ミシェル・フーコーやエドワード・サイードの議論を参照しながら、開発を経験的・実体的過程とみるのではなく、歴史的に構成された言説の束であり、ある特殊な世界の見方としてとらえる。ここでの言説とは「知識と経験を特定の方向に組織し、その支配的な力でそれ以外のものをおさえこむイデオロギー的な集合体である」[足立 1995: 134]. 20世紀後半、多くの人々が「第三世界は貧しく開発を必要としている」と、あたりまえのように考えるようになっていた。このようなもの見方が「蔓延する」に至る経過を描き出すのに、言説という概念が有効であると足立は考えたのである [足立 1995: 136]. 本特集の富山論文で述べられているとおり、足立はこの頃に、『開発』とオリエンタリズム」という研究会も行なっている。富山も指摘しているとおり、足立はこの研究会の冒頭で、「単なる…文芸批評家的な言説分析」では不十分である、と述べている。それはひとつには、「第三世界」の住民／国民としての主体（意識）がどのように形成されるのかを探るには、言説分析だけではなく、経験的な民族誌的記述が必要だと考えられるからである。もうひとつは、「開発過程で資本主義的なハビタス（予測・計算など）の強要」が行なわれている様をとらえる分析が必要であるからだ。¹⁾ このレベルに着目することによって、「外からの開発」対「内発的発展」といったように、意識の上では相反しているような政府プロジェクトと多くの NGO が、資本主義的ハビタスの強要という点では「同じであり、開発過程における共犯関係にある」ことがみえてくるからだ [足立 1997: 2-3]. しかしこの時点では、主体化をめぐる民族誌的記述についても、ハビタスの分析にしても、さまざまな方法論

1) ここでいうハビタス (habitus) は、生活スタイル、価値観、趣味などを含む、社会的に獲得された性向の総体の意である [Bourdieu 1990].

的な問題を抱えていて、それらの克服は今後の課題であるとされている [足立 1997: 2].

しかし、2001年に発表された「開発の人類学」[足立 2001]では、それとはかなり違う方向性が示されている。この論文ではまずエスコバルの言説アプローチとそれに対してなされてきた批判が紹介される。批判の第一点は、エスコバルの議論が開発をあまりに一枚岩的にとらえているという点である。実際の民族誌的調査からは、開発が多面的で多声的な過程で、複雑な競合の場であるということが浮かび上がってくる。もうひとつの批判は「袋小路論」である。エスコバルの依って立つポスト構造主義的な立場からは、批判はできても代替案を出すことはできないはずである。それにもかかわらず、エスコバルは開発に代わるものとして、社会運動を提起し、地域主義や土着性やサイバーカルチャーに期待をかける。しかしそれらの言説を分析することはしない [足立 2001: 2-3].²⁾ エスコバルらの言説アプローチの批判的検討を経て、1990年代後半以降の開発研究は、開発言説を重視し、開発を批判的にみながらも、開発の本質化を避け、関係論的な視点から詳細に事例を検討しようという方法をとるようになってきた。また、それらの研究に共通する特徴として、程度の違いはあれ、「その根底には、開発による負の影響を受ける者の声を聞き、さまざまな大きな力への彼ら対応を積極的に描き出そうという『政治的正しさ』を基本とするポストコロニアリズム的な立場がある」[足立 2001: 3]. 開発研究の潮流をこのようにまとめたうえで、足立は次のように書く：「筆者はこのような『政治的正しさ』を掲げた開発研究を批判するつもりはない。ただ、このような立場と少しずれた開発研究もあってよいと思う」[足立 2001: 3]. では、その「少しずれた立場」とはどのようなものだろうか？

それは開発によって負の影響を受ける者も含む、さまざまなアクターの「声」を考慮に入れながら、開発に関するさまざまな要素を関係論的に記述していこうという立場である。それはまた開発に関する人や言葉のみならず、モノや人工物すべてを対等に扱おうという、「存在論的対称性（シンメトリー）」にこだわる立場でもある [足立 2001: 3]. これは、すなわち、ブルーノ・ラトゥールやミシェル・カロン、ジョン・ローらが、科学技術が作り出される過程を、フィールドワークを通じて明らかにする作業から生まれてきた、「アクター・ネットワーク論」の立場である。では、足立がアクター・ネットワーク論をどのようにとらえ、それによって開発を含むさまざまな現象について、どのような新しい視野がひらかれると考えていたのか、簡単に振り返ってみよう。

4. 人とモノのネットワーク

開発は「科学技術と経済学に基礎づけられた社会工学の実験である」[足立 2001: 4]. それ

2) この方向での批判の例として [Fujikura 2001, 2013] を参照。

ゆえ、そこにはさまざまな異種混淆のアクターが関わっている：「援助国，援助機関，国家，役人，技術者，NGO，農民…灌漑施設，建設機械，トラクター，農薬，高収量品種，水田地…雨，土壤細菌，文化，アイデンティティ，表象，知識，開発計画書，開発スローガンの看板，開発経済学…熱帯農学，熱帯医学，大学…」[足立 2001: 4]。これら実に多様な登場人物や事物は，「人間／非人間，社会／自然，観念／モノ，近代／前近代という区別を超えて関係づけられている」[足立 2001: 4]。足立は，本特集において加藤も取り上げているジルベール・リストの文章を引用しながら，開発が，凍結胚や原子力発電所，オゾンホールと同じように，自然と社会の接するところに創り上げられた巨大物体（モンスター）であり，疑似物体である，という[足立 2001: 4; Rist 1997: 215]。このようなモンスターは，そのあり様を把握していなければどのようなものになってしまうかわからない。しかし，そのリスクを見通し，モンスターを飼いならすべき専門家たちは，社会科学と自然科学という近代学問の分業のために目を曇らされてしまっているのである[足立 2001: 5]。

アクター・ネットワーク論は，このような異種混淆のモンスターを把捉するために提唱されてきた方法論であり，そのため，上に例示したような近代の二元論（社会／自然，人間／非人間，観念／モノ…）を忌避する，「非近代（nonmodern）」の存在論にたつ。³⁾さらにこのようなものの見方の有効性は，テクノサイエンスや開発現象に限られるものではない。なぜなら，わたしたちの日常をとりまくすべての事象が，社会と自然の二元論を超えたハイブリッドから成り立っているともいえるからである。

アクター・ネットワーク論的なものの見方を説明するために，足立はよく道路交通の例を使っていた。日本では歩行者が道路の右側を歩き，自動車が左側を通行する。なぜそうになっているのかと学生に問うと，大抵，「法律でそうになっているからだ」と答える。しかし，実際に道路まで出て観察すると，そうではないことがわかる。「交通は，交通規則のみならず，それを取り締まる警官の視線，人々の目，交通安全ポスター，さらには道路の歩道や中央分離帯の物理的構造，車のハンドルの位置といったさまざまな人とモノが作用しながら，現実の道路交通のありようが決まっている」のである[足立 2007: 10]。いわれてみればあたりまえのことであるが，道路交通がうまくいっているとき，それを成り立たせている人とモノのネットワーク（関り合いの束）は人々の意識から消え去り，なにか適当な原因と結果の対応（たとえば，規則＝道路交通の維持）として理解される。そしてこの適当な対応が，われわれにとっての「事実」（ブラックボックス）となるのである[足立 2007: 9]。このようなネットワーク的な見方からすると，われわれをとりまく事象や出来事は，生成過程のネットワーク，「事実」

3) ラトゥールは自らの立場を反近代でも，前近代でも，ポスト近代でもないという。なぜならこれらはすべて近代的な世界の分割・布置の方法（modern constitution）から派生したものであるからだ。そのような前提をとりぞいた非近代（nonmodern）の地平にまず立たねばならない，とラトゥールは論じたのである[Latour 1993]。

として純化されたネットワーク、変容し消滅しようとするネットワークが錯綜し、幾重にも重なってできあがっているように見える。そして、アクター・ネットワーク論は、「世界を、『事実』にもとづいて理解すると同時に、『事実』が生まれてくる過程や条件にも目を向けようとするのである」[足立 2007: 10].

もちろん、領域横断的研究や文理融合の必要性は、とくに地域研究において、長年、認識されてきたことである。しかし、そこではたとえば、生態、社会、文化といった既存の区別を前提にしたうえで、それらの間の「相乗作用」や「相互入れ子構造」を検討する、というような構えがとられてきた。しかし、既存の安定した分断を前提にしたうえで横断的な研究を行なうのは「至難の業である。特定の文脈を設定して、自然と社会、自然と文化、社会と文化といった裂け目をアクロバティックに飛ぶしかない」[足立 2007: 12]. これに比べて、アクター・ネットワーク論は、現実がそもそもそのような分断の上に成り立っていない、つまり、そもそも現実「文理不分」というところから出発し、より小まわりのきく方法を与えてくれるのだ、と足立はいついた。⁴⁾

とはいっても、このように既存の近代的な学問分業によって作り出されてきたさまざまな「事実」(原因と結果の素早い結びつけ)から出発しない姿勢は、「きわめて冗長で…『効率』の悪い方法」でもある[足立 2007: 12]. 時間のかかるフィールドワークを通して、さまざまなアクターの絡み合いの様相をとらえようとする方法は、素早い「犯人探し」[足立 2007: 12]には向いていない。その意味で、どのアクターが「悪者」で、どのアクターが「被害者」であるかが、あらかじめ措定されていなければならない「政治的に正しい」批判の立場とは、どうしても、「少しずれた」ものになるのである。⁵⁾

1990年代終わり頃の開発研究の動向のなかで、足立が関心をいただいていたものに「プロセス・ドキュメンテーション」というモニタリング手法の提唱がある[Mosse 1998; 足立 2007: 25-26]. それは開発プロジェクトを「はじまり」と「おわり」のある物語としてではなく、あらかじめ結末のみえない複雑な過程として記録していこうとする試みである。そのドキュメンテーションには、従前のようにプロジェクト・マネージャーや援助組織の担当者のみではなく、「受益者」や開発研究者も参加し、またそれぞれのアクターがそれをリソースとして享受できるようにすべきだというのである。さらにその記録はある「客観的」な視点から統合されている必要はない。「興味・利害や解釈枠組みが異なるさまざまなアクターがそれぞれに解釈し、アクター間の交渉、競合の場でのリソースの一つとして利用すればよい」のである[足立

4) 地域研究の方法論に関する考察としては、足立による立本成文著『地域研究の問題と方法』の書評も重要である[足立 1998]. 足立はこの書評を書くのに丸2年を費やした、と言っていた。

5) しかしまた、足立はブラックボックス化して「真理」や「常識」となった知識や出来事を脱構築して、別の見方を与えるアクター・ネットワーク論は「フーコーと同じ射程を持ちながら具体的な対象に対してより使いやすい手法を提供している」とも言っている[足立 2001: 11].

2001: 26]. 足立は、アクター・ネットワーク論的な開発研究も「プロセス・ドキュメンテーション」のひとつとして位置づけられるのではないだろうかという。それはアクター・ネットワーク論が既存の学問の「難解語句を用いず、開発過程での『悪者』や『陰謀』を指し示さず、政治的なメッセージを入れない民族誌」[足立 2001: 26]であるがゆえに、興味や利害の異なるさまざまな人々を巻き込んでいく可能性をもっているからである。

いずれにしても、このような研究は時間のかかるものである。足立はこれを「一を聞いて十を知る」のではなく「十を聞いて一を知る」ような姿勢である、としばしば言っていた。そして、このようなものの見方にとって、「地域研究は居心地のよい場所である」とも書いている[足立 2007: 12]。なぜなら、地域研究は、ディシプリンというものを超えていこうとするベクトルをもっており、「特定のディシプリンに還元して、物事を考えなくてよいからである」[足立 2007: 12]。また、付け加えるならば、地域研究という場では、フィールドワークという、手間ひまのかかる発見的方法がいまだに重んじられているからである。

5. 「非近代」の地域研究

ここまで足立明の仕事をほぼ3つの時期にわけて、簡単に振り返ってきた。冒頭で触れたスリランカの友人たちからの手紙にも書かれていたとおり、足立の学問的関心はここで取り上げることができたものよりも、もちろん、広く、多岐にわたるものであった。しかしここで触れることのできたものだけでも、農業労働の経済人類学、開発言説批判、アクター・ネットワーク論と、対象もアプローチも、かなり変わってきたことがわかる。しかし、一方で、それらを一貫した問題意識や姿勢も浮かび上がってくるように思える。

たとえば足立がアクター・ネットワーク論の説明で使う日本の道路交通の例で、「法律でそう決まっているから」というのは、本当は答えになっていない、というとき、それは、スリランカ農村の労働交換の研究で、当該社会における文化的規範や規則を描いただけでは民族誌として不十分である、というのと、ある意味で、同じことをいっているのではないだろうか。平たくいえば、うわべだけではない、「ホンマのところ」はいったいどのあたりにあって、それにどうやったら近づくことができるかを考え、工夫するのが学問の使命である、というような姿勢である。それは、足立が、言説分析やオリエンタリズム批判を参照しながら、「外からの近代化か、内発的發展か」といった既存の議論の文脈とはまったく違うところに「開発の人類学」を設定しようとした努力のなかにもみることができる。スリランカの友人たちが、足立は一貫して「科学的」であったというのも、このあたりと関係があるのかもしれない。また、このように、足立は、さまざまな理論的動向に通暁していたのであるが、一方で、上でみたように、アクター・ネットワーク論について論ずるとき、それが、既存の学問の「難解な語彙」を使わないことによって多様な人々を巻き込んだ探求を可能にしうることを評価している。そこ

に「学問の解放」というスローガンに共鳴していた学部生時代から一貫するものをみてとることも可能だろう。

上にみたように、近代的な二分法や学問的分業にしばられず、それゆえに、さまざまな関心をもつ人々が集まってワイワイガヤガヤと議論を交わすことのできる、人類学や地域研究という「場所」を、足立は大切にしていた。この特集に論文を寄せた6名も、そのようなアリーナで、同僚として、共同研究者として、学生として、足立と出会い、対話してきた人たちであり、ここに掲載されている論文や研究ノートは（内山田も書いているとおり）足立明との「会話のつづき」でもある。加藤は足立の重要なテーマであった「開発」を取り上げ、足立とともに読んだリストの著作を重要な導き手としながら、開発という概念の「初源」から植民地主義の時代に至る生成の歴史について考察している。内山田は、震災後の東北での自らのフィールドワークについて記述しつつ、アクター・ネットワーク論の可能性や限界についての足立との「会話のつづき」を行なっている。とくに、*We have never been modern*（「わたしたちは一度も近代人ではなかった」）を書いたころのラトゥールの議論 [Latour 1993] ではなく、その約20年後にラトゥールが展開しはじめた *modes of existence*（「存在様態」）をめぐる議論 [Latour 2013] を取り上げ、その含意について、原発事故をめぐるさまざまなスケールや言葉の乖離、繚れと照らし合わせながら考察している。これに関して少し付け加えると、足立はアクター・ネットワーク論についての考察をかさねるなかで、少なくとも2005年頃から、それを「人・モノ・ことばのネットワーク」と考えた場合の、「ことば」の位置づけについて悩んでいた。そして自分で納得のいく整理ができないまま、最後まで考えつづけていた。言語行為論や記号論が重要な役割をはたすラトゥールのこの新しい著作を、足立はいま頃「あの世」で熱心に読んでいる、かもしれない。足立に主指導教員として指導を受けた中村の、スリランカの老人ホームにおける「死と看取り」についての論文は、足立と「何度も何度も」繰り返した長時間の会話を経てまとめあげられたものである。やはり学生として足立の指導を受けた宗野は、ウズベキスタンで手織り物をつくる女性たちを、ソ連解体後の市場経済への移行と伝統的家族観の復興のなかで「二重に周縁化される女性」というステレオタイプを超えたかたちで描き出そうとする。1994年11月に足立とともに『『開発』とオリエンタリズム』研究会を組織した富山は、戦後日本における「復興」という「お守り言葉」を通して「開発言説」を再考している。足立とは異なるアフリカ専攻所属の学生であるため、まったく違う建物に自分の机があるにもかかわらず、よく足立の研究室を訪ねては話を聞いていた楠は、ケニア植民地時代に登場する「土壌侵食」をめぐる科学的言説が、植民地支配者による現地社会への介入の可能性をつくり上げていく様を描いている。

6. 結びにかえて

富山は、その論考の最後で、集団性を拡大し、新たなリアリティをつくり上げるような研究の重要性について述べたあと、3・11以後の「この国の壊滅的状况の中で[足立さんは]どのような研究サークルを構想していたのだろうか」と問うている。その問いへの答えを、本人から直接得ることは、もちろん、もうできない。その代わりに、先に触れた、スリランカの友人たちからの手紙の最後の部分をここに引用して、本特集の序文の結びとしたい。なぜなら、ここにも、足立教授がその研究と日常生活を通してつくってきた、つながりや集団性のあり方が反映されているように思うからだ。

And to our friends and colleagues who have gathered here:

We lost prematurely a good lovable jolly person, an intellectual who had no hang ups and who created a space for all of us to be included.

そして[足立教授を偲ぶために]ここに集まったすべての友人と同僚に：

わたしたちは陽気で、愛すべき、よい人物を早くに亡くしてしまいました。彼はつまらない拘りや執着をもたない知識人で、わたしたち誰もが自由に参加できる空間をつくってくれる人でした。

引用文献

- 足立 明. 1988. 「シンハラ農村の労働交換体系」『国立民族学博物館研究報告』13(3): 517-581.
- Adachi, Akira. 1990. *Labor Exchange and Peasant Agriculture: A Case of Sinhalese Agrarian Settlements in Sri Lanka*. An unpublished doctor thesis submitted to Faculty of Agriculture, Kyoto University.
- _____. 1995. 「開発現象と人類学」米山俊直編『現代人類学を学ぶ人のために』世界思想社, 119-136.
- _____. 1997. 「冒頭発言1」足立明編『「開発」とオリエンタリズム』(『総合的地域研究』成果報告シリーズ).
- _____. 1998. 「書評：立本成文著『地域研究の問題と方法—社会文化生態力学の試み』京都大学学術出版会」『ソシオロジ』18(2): 91-96.
- _____. 2001. 「開発の人類学—アクター・ネットワーク論の可能性」『社会人類学年報』27: 1-33.
- _____. 2003. 「災害研の古机」『石田紀郎退官記念文集 水かがみ』, 31-32.
- _____. 2007. 「人とモノのネットワークから地域を見る」『紅萌』12: 9-12.
- Befu, H. 1977. Social Exchange, *Annual Review of Anthropology* 6: 255-281.
- Bourdieu, P. 1990. *The Logic of Practice*, translated by Richard Nice. Cambridge: Polity Press.
- Escobar, A. 1984. Discourse and Power in Development: Michel Foucault and the Relevance of His Work to the Third World, *Alternatives* 10(3): 377-400.

- Fujikura, T. 2001. Discourses of Awareness: Notes on Criticism of Development, *Studies in Nepali History and Society* 6(2): 271-313.
- _____. 2013. *Discourses of Awareness: Development, Social Movements and the Practices of Freedom in Nepal*. Kathmandu: Martin Chautari.
- Latour, B. 1993. *We Have Never Been Modern*, translated by Catherine Porter. Cambridge: Harvard University Press.
- _____. 2013. *An Inquiry into Modes of Existence: An Anthropology of the Moderns*, translated by Catherine Porter. Cambridge: Harvard University Press.
- Mosse, D. 1998. Process-oriented Approaches to Development Practices and Social Research. In D. Mosse and A. Reaw eds., *Development as Process: Concepts and Methods for Working with Complexity*. London: Routledge, pp. 1-30.
- Rist, G. 1997. *The History of Development: From Western Origins to Global Faith*, translated by P. Camiller. London: Zed Books.
- 立本成文. 1996. 『地域研究の問題と方法—社会文化生態力学の試み』京都大学学術出版会.

Introduction: Adachi Akira and Non-modern Area Studies

FUJIKURA Tatsuro*

This introductory article to the special issue remembering Professor Adachi Akira recollects some aspects of his life and thoughts by looking at some of his writings. It starts from his essay on his undergraduate days at Kyoto University when he was a student of sanitary engineering interested in environmental issues but was disillusioned by professors who spent their carrier, for example, researching about how to contain radioactive waste in cement blocks and dispose them into the sea. The article then reviews some of his academic writings, starting from his study on the labor exchange system in Sinhalese agricultural settlements, moving onto his critical anthropological writings on development, and to his discussions of ‘actor-network theory’ as an exposition of a ‘non-modernist’ area studies. Through this article, I seek to mark out parts of his intellectual itinerary, noting the transformations as well as his enduring concerns such as empirical accuracy, openness, embracement of contingency and complexity, and ecology in its broadest sense.